

今日から始める  
自然観察

# 冬の移ろいを告げる フユシャク類



やどきひでもり  
矢崎英盛

NACS-J自然観察指導員  
首都大学東京大学院博士  
前期課程で蛾を研究中

虫たちの姿の少なくなった冬の森には、雌の翅が退化して飛べない「フユシャク類」という不思議な蛾が現れます。身近な都市公園などでも出会える、魅力的な冬の昆虫の世界をのぞいてみましょう。

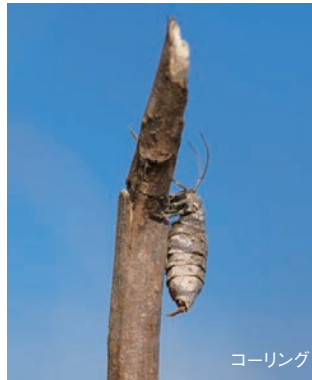


クロテンフユシャクの交尾。  
雌の翅はほぼ消失し、飛ぶことができない。一般にフユシャク類では交尾が成立すると、雌が上になり雄を引きずるように木などを上っていく行動が見られる。交尾後、雌は木の上などで産卵する。

## もっと知りたい!



詳しく知りたい方には、『日本の冬尺蛾』（発行：むし社／A4判／価格：6400円＋税）がおすすめ。フユシャク類の第一人者である中島秀雄博士らによる長年の研究成果と、研究者たちの情熱に触れることができる。



コーリング

## こんなところを探してみよう

フユシャク類の雌は主に夜間に木の幹などを歩いて上り、高さ1m前後（例外あり）の位置で、フェロモンで雄を呼ぶ「コーリング」を行う。雄は飛び回りながら雌を探し、交尾する。日中は落ち葉の下などでじっとしていることが多く見つけにくい。公園の柵や白っぽい人工物の壁など目立つ場所に止まっていることもある。雌は木のうろやネームプレートの裏などに隠れている場合もある。

雄は氷点下でも飛べ、雌は翅が退化した特殊な蛾

「蛾」は国内で記録があるだけで6000種以上（蝶は300種前後）を数える、魅力の尽きない昆虫です。そのうち約900種を占めるシャクガ科（一般に幼虫がシャクトリムシの形態のグループ）のうち、成虫が冬だけに出現する35種を「フユシャク類」と呼んでいます。

このフユシャク類は、なんと雌は翅が退化して、飛ぶことができません。さらに雌雄とも口吻が縮小しており、多くは成虫で餌を取らず、シャクトリムシ時代に蓄えた栄養を使って生きています。氷点下の寒さでも活動可能で、冬の間に繁殖活動を行って、ほかの昆虫たちの姿が目立つようになる春の盛りまでに、成虫の姿は見えなくなります。どの種にも毒はなく、昆虫の少ない冬には格好の観察対象です。

フユシャク類の観察の最大の魅力は、動植物が眠りについたように見える冬の森で、ふと前触れもなく現れる彼らとの出会いの、驚



**EPSON**  
EXCEED YOUR VISION

本コーナーは、エプソン純正カートリッジ引取回収サービスを利用されたお客様のポイント寄付によるご支援をいただいております。

きと喜びそのもの、と言ってしまうのではないのでしょうか。雌が木の幹をよちよちと上っている姿に出会った瞬間の喜びは、いつも新鮮なものです。大きく膨らんだ腹には、卵がいっぱい詰まっています。

またフユシャク類は、冬の間次々に種が入れ替わりながら出現するため、同じ場所でも時期が違えば、異なる種のフユシャク類に出会うことができます。翅がほぼ消失しているものから、比較的大きな翅を持つものまで、種ごとに雌の翅の退化の程度が異なることも観察できるでしょう。一見、変化を感じとりにくい冬の森で、フユシャク類の存在は、季節が静かに、しかし着実に歩みを進めていることを、我々に教えてくれているようです。(写真は著者撮影)